

ほんとはネ いじめつ子じゃないよ

ふるさとを中国にもつ少年の記録

善元幸夫



善元幸夫

日本語学級の子どもたちがつくった中国の農民学校のはり絵





ボブ・ノンフィクション⑪

ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ

定価 880円

発行 1984年2月 第1刷©

著者 善元幸夫（よしもと ゆきお）

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 ボブ・ノンフィクション

新宿区須賀町5

271

株式会社

式会社

りかえいたします。

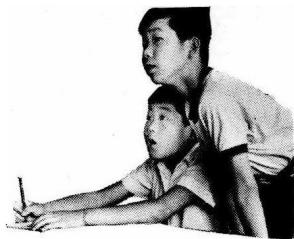
7764

日本財団支援

笠川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

はじめに



この話の主人公清有君（しゆじんこうチヨウヨーツン）という子どもは六年前、中国黒龍江省から引揚げてきた子どもです。有君は日本にきて、ぼくが先生をしている、東京の江戸川区立葛西（かさい）小学校の日本語学級に入学しました。日本語学級といふのは、中國や韓国（ちゅうごく　かんこく）から引揚げてきた子どもたちがはじめて日本語を学ぶ学級です。

この本は、有君（ヨーツン）が九才で日本にきて、小学校二年生のクラスに入学し、やがて中学校一年生になるまでの六年間の記録（きろく）です。有君は自分にどんなにつらいことがあっても人を信じていく子どもです。ぼくはこの六年間で有君から“やさしさ”とは何かということを教えてもらったような気がします。

有君（ヨーツン）は日本の名前を清野君夫（きよの　きみお）といい、小学校に在学（ざいがく）中数（ちゅうかず）おおくの作文や、詩などをかきました。これをもとにして、ぼくと有君の“心の成長（せいかつぢょう）記録”としてこの本を書きのこそうと思いました。

もくじ

生まれでたなやみ

有君との出あい

7

おも荷を背負つた有君の生いたち

19

はじめての日本

お父さんは日本人

27

日本、そしてあたらしい学校

34

おいつめられていく有君

みんながにげていく

39

テレビの上に石が六つ

48

中国によせる心

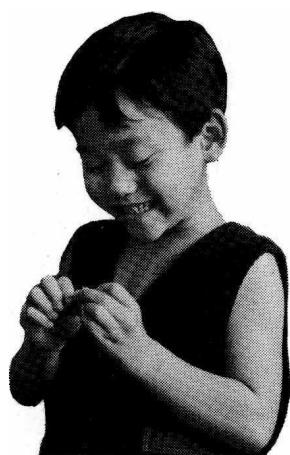
57

有君と、まわりのできごと

67

トイレで糞食を……。背中にゴミを……

74



「人間」について勉強して

人間の子は人間？ 85

「しょくぶつにんげんも、にんげんです」

96

ささえあう友だち

わたし、日本語こわいです 115

ほんとうの美しさとは 131

115

出あいをもどめて

先生、ぼく日本人になるの 139

「としあきくんは、心の中でたたかっている」

ヨーナン
有君と、二人だけの「卒業式」 169

150

中学生になつて——いじめられる側にたつ
友だち 175

いじめる人にもさびしさがある 181



表紙 絵 日本語学級の子どもたち

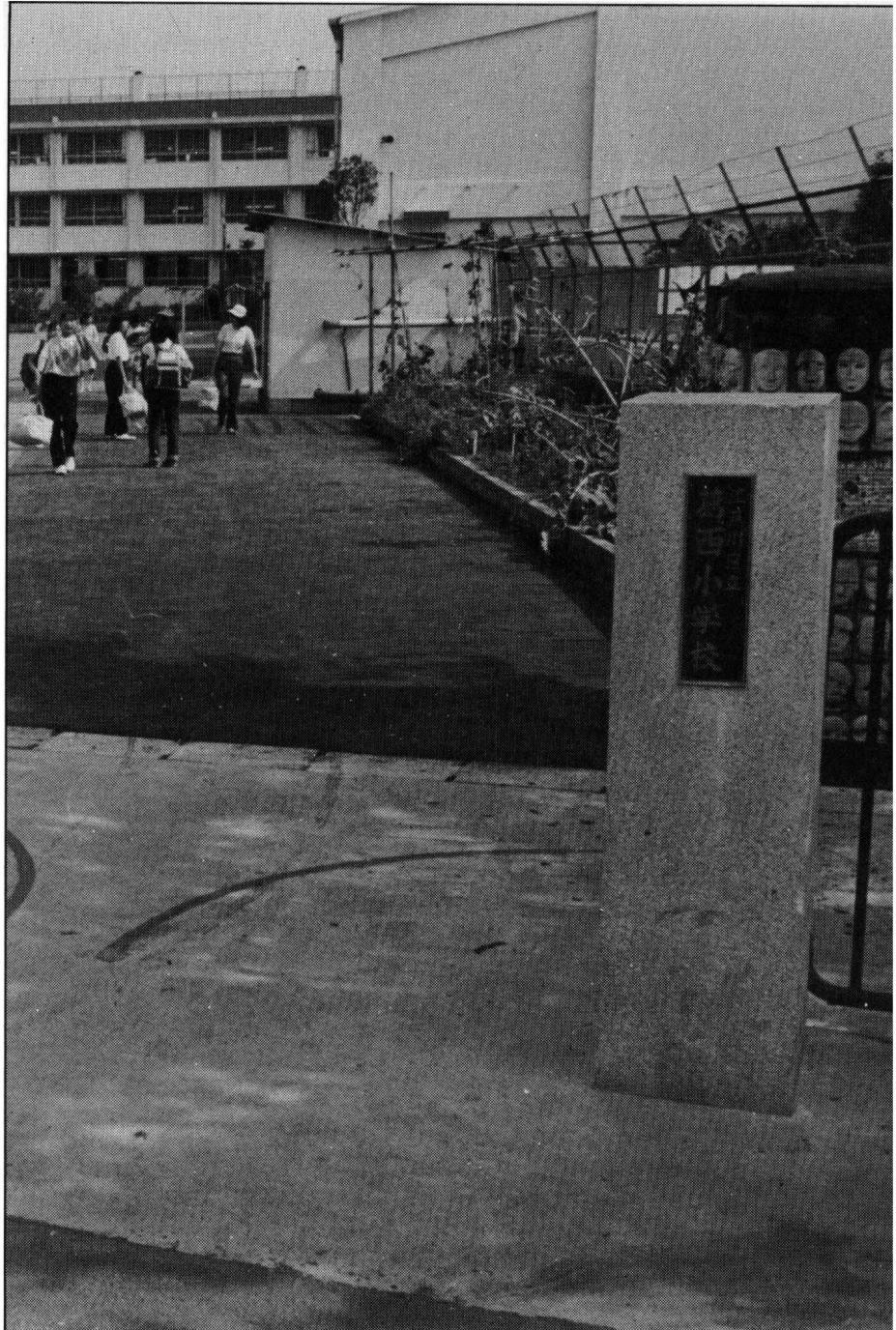
ちがつくつたはり絵。
はたらく中国の子ども。

写真提供（敬称略）

菊地信夫

高槻 彰

生まれでたなやみ



ヨージン
有君がこれから日本語を勉強する葛西小学校。
かさい

ぼくが びょうきのとき

とうさんも かあさんも

つかれはて いました

ぼくは 心こころの中なかでない いました

どうしてぼくの ような 子どもが

生まれたの だろう

ひとにはめいわくかけるし こまらせるし

でも いまは うれしい

こうやつて 生きているからです

有君ヨージンとの出あい

一九七七年の二月、ぼくは二十六才さか。先生になつていしばんおもしろくなりかけていたころのことです。子どもたちをかえしてしまつた、だれもいない日本語学級のぼくの机つくで仕事をしていました。

すると、教室のうしろの戸とがあきました。お父さんと、お母さんにつれられた、体からだのわるそうな男の子が元気なくはいつてきました。そのあとから妹もうどらしい女の子二人がおくれてはいつてきました。その男の子は目がわるいのか、目をぐつとほそめ、顔をゆがめていました。今にもたおれそうに机つくに手をつき、ぼくにちがづいてきました。その子が、これからお話ししようとする有君ヨージンという少年です。

「先生、子どもをよろしくおねがいします」

有君ヨージンのお父さんは中国語でそういうながら、入学の書類しょるいをみせました。それは、有

ジンが入学するために日本にきてからかかれたものです。中国のときのことがかかれてありました。

『五才の時に発見—右手、にぎることができない。ことははよい。よだれがでっぱなし、脳のうがすこしたりない』

調書ちょうしょにはたったこれだけしかかないであります。日本にきたとき、有君ヨウジンは大人おとなからこうみられたのでした。これをかいた調査官ちょうさかんはなにがいいたかったのでしょうか。ぼくはとまどつてしましました。

「あなたが清有君チョンヨウジン?」

「……」

ぼくは、もう一度ゆっくりききました。

「あなたが清有君チョンヨウジン?」

有君ヨウジンは、じつと考かんがえて います。

「……はい。ぼく、清有君チョンヨウジンです。中國人ちゅうごくじんです」

「としはいくつですか」



日本語学級の窓には「にほんご」とかかれています。教室のすみに民族人形があります。

「……九才」

有君は話しながらも目をほそめ、そわそわしながら、まわりをみて います。

有君のお父さんとお母さんは不安そうにぼくと有君のやりとりをきいて いました。

「あなたは、妹の桂栄？」

「はい、そうです。これはお兄さんと五才の妹の桂華です」

「うん、しつかり答えられたね。有君と桂栄は明日から学校で日本語の練習だよ、がんばろうね」

「はい」

桂栄はしつかりした口調でこたえました。お父さんとお母さんは、やつと安心したようでした。

「これから、有君と桂栄をよろしくおねがいします」

有君のお父さんはそういって立ちあがりました。有君はヨロヨロしながら、みんなからすこしおくれて教室をでていきました。

その足どりは、いかにもたよりなさそうでした。

あたりはだれもいなくなつて、教室はふたたびシーンとなりました。日本語学級の子どもは、中国や韓国で生活していたため日本語はぜんぜんできません。しかも有君ヨーツンはそのうえに体の右半身からだみぎはんしんが不自由ふじゆうです。これから先、有君ヨーツンは日本語学級でどうしたらいいのでしょうか。

つぎの日になりました。

ぼくが朝教室にいくとみんな元気よく、たのしそうに遊んでいました。
有君ヨーツンと、桂栄ケイヨウは教室のすみにじつとたつていきました。

「先生、あの子だあれ」

「あたらしい友だちだよ、さあ勉強だ。きょうはだれ」

「ぼくです。きりつ。……れい」

「おはようございます」

「おはようございます」

「きょうは、中国からあたらしい友だちがきました。名まえは……」

「先生、知つているよ。清有君チンヨーツンと清桂栄チンケイヨウだろう」

こういったのは、宝林でした。宝林は、お母さんから、こんどあたらしい子どもがくるということをきいていたのです。

「どうして宝林は、そんなことよく知っているの？」

こうきいたのは、黄文ホウジンでした。

「うん、ぼくなんでも知っているよ。ぼくのお母さんは、じぶんも引揚げ者だからといつて、今でも中国からくる人の世話をしてるんだって……。清さんは黒龍江省からきたんだよ。有君ヨーリンのお父さんは小さいときに中国にいったんだ」

「宝林先生、もう話はいいですか？」

ぼくがこう話したのでみんなは、おかしくってわらってしまいました。

「宝林ボーリンがみんないたので、先生は話すことがありません。今日から二人ここで勉強します。みんな友だちになつてください。いいでしようか？」

「はーい」

元気よく子どもたちは返事をしました。そして、つづけて、「それでは、宝林先生、二人に日本語学級の説明をしてくださいませ」というと、みんなは、おかしくてまた

わらいながら宝林の方をみました。宝林はちょっとはずかしそうでしたが、それでも説明はなかなかじょうずにやりました。

「ええ、日本語学級は、今、中国と韓国からきた友だちが、葛西小学校に、十七人います。はじめは、この教室で勉強して、だんだんできるようになると、普通学級に通級します。今、日本語学級は、初級と中級のクラスがあります。一人とも、きたばつかりだから初級です」

宝林は、中國語でまとまりのよい話し方をしました。二人ともすこし安心したようです。

「それからいいわすれたけど、日本語学級の目標は、「一人はみんなのため、みんなは、一人のため」です。先生は、中国からきた子どもは團結が必要といいます」

宝林はつづけて、スラスラいつたので、ぼくはよけいに、有君の体のことがきになりました。

「はい、これで紹介はおわったけど、二人にあいさつをしてもらいます」

こういつて、ぼくは二人を黒板のまえにつれていきました。

「ぼく……清有君です……ぼく中国人です……」

「有君はボソボソといったような話かたし方でした。つぎに桂栄です。」

「わたしは、清桂栄です。わたしたち日本にきたばかりです。どうぞよろしくおねがいします」

桂栄はつつかえないで、きれいに答えました。

「さあ、勉強をはじめるけど……」

「先生、質問です。どんな字かくんですか」

「そうだね、二人ともじぶんの名前をかいてください」

ぼくがこういったあと、桂栄はさらりとかきましたが、有君の方はなかなかうまくいきません。たまりかねたのか、桂栄が兄の名前を手つだつてやつたのです。

「先生、有君どうしてかけないの……」

まわりの子がききます。

「うん、あのね、有君は小さいとき、病気したの。だからよくかけないんだ。みんなも、有君の世話をよくしてやってください」